

一物の見方、考え方— 経営に生かす仏教哲学

青木伸雄

1. まえがき

我が国のバブル経済が崩壊してから18年たち、やっとその後遺症から脱却しようとしたやさきに、アメリカのサブプライムローンに端を発した証券大手のリーマン・ブラザーズの破綻は、結果として世界経済に波及、大恐慌への恐れへとなってしまった。

世界経済が更に一段と減速すれば、我が国の企業を問わず、外需に依存する国々の景気後退は、先の経済協力開発機構(OECD)の2010年の予測に見られる如く失業者が日米欧で今より八百万人多い約四千二百万人に達することになる。

それは、業種別に、建設、不動産や自動車業界での失業者の影響が多いとされている。

OECDの予測では、世界経済の減速は雇用悪化となり、その影響は高齢者や非正規労働者に及びやすいとされている。

政府の主要経済の統計を見る限り、軒並み悪下へと変化している。

それは、いうまでもなく外需依存度の高い日本経済は好むと好まずを問わず、世界の景気後退の影響をもろにうけるということである。

結果として、企業は本格的に、人件費の抑制等の手段に踏み込む恐れがある。

世界に君臨したアメリカ帝国の崩壊は、他人ごとではなく、我が国もその渦の中に巻き込まれていくのである。

企業の経営者も、従業員も心して対応しなければならぬ時代に突入したことになる。

それは、年功序列や終身雇用制度の崩壊、能力給の導入に続く、何時、くびを切られるかわからない大変

な時代がきたということである。

このような大変化の時代に生きるために、あえて仏教の先人の教えを学び考えてみることにしたい。

これからの難局に対して、会社にとって最も重要な経営資源はやはり人材であると愚考する。

ともすると、経営者や管理者にとって都合の良い人材を登用し、用いる傾向にあるが、様々な個性を持った人材に対して、企業に対する帰属意識をもたせ、目的意識をもたせることが、この世界経済の同時不況をのりきる唯一の方法だと考え、「道即是平常心」で平然と対応する考え方を学び、「釈迦十大弟子」でいろんな性格や価値観を知り、「本来無一物」で一喜一憂をしない人間の生き方を学んでみることにする。

あらゆる経営資源の中で、最も重要なものは人材であることを肝に命じて考えてみたい。

2. 「本来無一物」とは

万有諸法は総て仮りの存在であって一物として執着すべきものがないという教えであり、中国禅宗の「六祖壇経」にてでくる言葉である。

中国禅宗の祖、菩提達磨(生没年不明)が南インドより師の般若多羅の教えをうけ、諸国を化導しながら梁の普通元年(520)に中国に入り、武帝に迎えられて禅を説いたが用いられなかった。

その後、魏に渡り嵩山少林寺で壁に向かって座禅すること九年、人々からは壁観婆羅門と呼ばれた。

大通2年、奥義を弟子の慧可(二祖)にさずけた。以後、僧璨(三祖)、道信(四祖)を経て、弘忍(五祖)に至っている。

弘忍(五祖)から慧能(六祖)へ引き継がれることになる。

慧能(六祖637~712)とは、唐時代の僧で中国禅宗の第六代目で、寺院に住み込み、寺の雑役をする寺男という身分の低い存在であった。

唐の貞観12年(638)に生まれ、幼時に父と死別し、薪を売り母を養う、咸亨2年に弘忍に遇って禅の奥義を授けられた。

その慧能が韶州大梵寺の壇上で説き示した法を「六祖壇経」、正確には「六祖大師法宝壇経」といわれる、一卷十項からなる壇経をいっている。

その中で、「本来無一物」について「人間生まれてきた時は何もっていないじゃないか、もともと実体がない仮りの存在だから執着すべきものは何もない。永遠不変の固定的実体がない三諦(空諦、假諦、中諦)の一つの空である(諦とは審諦の義で、つまびらか、あきらかの意)」と説いている。

著者：広島大学生物生産学部講師
元近畿大学産業理工学部客員教授
日本禅画家協会名誉理事
中国少林書画院名誉教授
法号位 法印 禅画位 奥伝
青木伸雄
(野風生)
雅号 樹泉